



MUTEX は、石井香久子、伊藤光恵、下村好子、鈴木純子というメンバー全員武蔵野美術大学テキスタイル卒業であるアーティストが形成しているグループである。ミュテックスとは「コンピュータプログラミングにおける技術用語。クリティカルセクションでアトミック性を確保するための排他制御や同期機構の一種である」( Wikipedia )、グループ名がたまたまコンピュータの技術用語とは面白い。排他制御し、同期機構する。確かに相応しいのかも知れない。ここではまず、テキスタイルと現代美術の関係性を探る。現代美術とは神や権力を排他し、既存の印象を拭き去り、人間が「いま、ここに生きていていい」ことを立証することが使命である。あらゆる卑近な素材を用い、その時代のあり方を問うことが求められている。それに対してテキスタイルデザイナーは「服飾またはインテリア(乗物の内装を含む)用途のテキスタイル=ファブリック(布地・織物)をデザインするデザイナーのこと。染織全般においての専門家とされ、染織家とも呼ばれる。糸選び、配色、図柄、加工方法、質感等、加工前の素材布において「織り」と「染め」の幅広い範囲に及ぶ意匠を行う」( Wikipedia )、

インテリアデザイナーで、染織家でもある。様々な工程をマスターし、「織り」と「染め」の意匠を行なう。「染織」という名が古い因習を思い起こし、デザインというよりも工芸を連想させるが、実際の作品群を見ると、現代美術よりも過激で、繊細で、考え抜かれているのかも知れない。頑張り、現代美術。様々な素材が平面として定着し、素材自体が彫刻のように隆起する。MUTEX のメンバーが自在な発想を持っていることが前提であろうが、現代美術よりも自由に見える。糸、布といった限定された素材であるからこそ実現できる世界であろう。「美術」が優位で、その他が下に見られる現状を変える必要が生じてくる。私はこの展覧会を見て、優れたいけばなの団体を思い起こした。いけばなもまた、保守的な団体もあれば革新的なグループが存在する。ステップスギャラリーで展覧会を行なう現代美術は、世間的には虫の息である。多様な価値観が実現すべき世界に、なぜ世間で認められている価値が必要となる。ここで行なっている現代美術のアーティスト達も、怯まず、様々な実験を行なって戴きたい。MUTEX の刺激もあろう。MUTEX にまたここで展覧会を行なって欲しい。

